

が起こっている。ましてや、独自の漫画文化を持っていないシンガポールでは、なおさらその傾向は強い。シンガポールでは、日本漫画は中国語漫画として幅をきかせている。その一方で *Mr. Kiasu* のような地元の漫画は英語による作品であるため、日本漫画と地元の漫画は競争相手にはならないのである。シンガポールのアニメは現在実験的な階段にとどまっているため、地元のテレビ局はまだ放送していない。

第三に、中国語版の日本漫画と日本アニメのビデオCDは大変割安である。アメリカおよび地元の漫画の半値、或いは3分の1くらいの値段というように、日本漫画の方が割安であることだ。漫画本と雑誌は3～5ドル(190～360円)くらいである。海賊版の場合は更に安く、アメリカ漫画と地元の漫画の3分の1くらいの値段になる。レンタルの場合は50セント(36円)であり、日本アニメのビデオCDは一枚3～10ドル(190～720円)くらいである。学生でも自分たちの小遣いで日本漫画本とアニメVCDを買ったり、借りたりできるのである。

第四に、日本漫画とアニメを取り上げるメディアも多く出現した。テレビは依然として、最も有力なメディアである。テレビのアニメ番組は、近年大幅に増加した。現在、週に25本の日本アニメが、15時間かけて放送されている。日本と違って、シンガポール人の多くの人々は、まずテレビアニメを見てから、好みの作品の漫画本を買う。テレビ放送されたほとんどのアニメ番組の漫画本が、シンガポールでの売れ行きがよい。例えば、『ドラえもん』、『ドラゴンボール』、『らんま2分の1』、『平成犬物語バウ』、『セーラームーン』、『ポケモン』、『デジモン』などである。

1990年代以降、新しい漫画消費文化が日本、台湾、香港から、シンガポールに流入してきたことにより、漫画本およびテレビアニメの他に、日本漫画を普及させる新しいメディアが、次々とシンガポールに登場した。

シンガポールには今、コミック・ショップが百軒ほど存在している。一般的には、コミック・ショップの中で日本漫画は9割を占め、残りの1割は香港、台湾、アメリカおよび地元のものである。一方、40

数軒あるレンタル漫画ショップのほとんどが日本漫画を取り扱っている。また、一般書店および路上のカウンターでも日本漫画を扱っており、紀伊国屋、大衆書店、商務印書館などの大型書店でも、日本漫画のコーナーを設置している。それらの書店によると、日本漫画が最も売れ行きのよい出版物の一種である。

1998年に、漫画喫茶と漫画図書館というものが出現した。「漫画大王」という漫画喫茶では、1万五千冊の日本漫画の蔵書がある⁶⁾。同時期にオープンした「蔵経閣」という漫画図書館は、シンガポールでナンバーワンを誇る3万冊もの日本漫画本を所蔵する。

現在、シンガポール人が日本漫画に接する機会が増え、毎年6月に開催される、ワールド・トレード・センターやサンテック・シティの書籍展でも、日本漫画の数が増加している。『聯合早報』も日本漫画に関する記事を定期的に掲載している。1999年5月、『聯合早報』がシンガポール日本文化協会と「日本漫画がシンガポールに与える影響」セミナーを共催し、会場は超満員となり、マスコミも注目した。また、シンガポール人がインターネット上でも日本漫画とアニメに関するホームページを作成し、アクセス数も増加した。

最近、大学、ポリテクニク、ジュニア・カレッジおよび中学校の課外活動の中にも、漫画・アニメクラブが作られるようになった。1998年と2001、タマセック・ポリテクニクが日本アニメ祭を開催した他、シンガポール国立大学では日本漫画とアニメを中心とする日本大衆文化という講座が開講され、大学で最も人気のある専修科目の一つとなっている⁷⁾。

特色

日本、台湾、香港等の地方と比較して、シンガポールの日本漫画とアニメ文化には、次の4つの特色があげられる。

第一に、日本漫画とアニメは華人サブ・カルチャーである。日本の漫画本、雑誌、アニメのテレビ番組やビデオCDには、中国語版のものが圧倒的に多